

内藤文庫所蔵の文瀾閣四庫全書について

— 附・長澤文庫所蔵の文瀾閣四庫全書

はじめに

関西大学総合図書館の内藤文庫は東洋史学者・内藤湖南（一八六六—一九三四）の旧蔵書であり、日本における東洋史学関連コレクションとして重要な位置にあることはいうまでもない。

この内藤文庫には多くの貴重書が含まれているが、そこに四庫全書（文瀾閣）の書物の原本が所蔵されていることはあまり知られていない。

もちろん従来、その存在がまったく忘却されていたわけではなく、内藤文庫整理の初期に刊行された『関西大学所蔵 内藤文庫漢籍古刊古鈔目録』（関西大学図書館、一九八六年）を見ると、口絵の冒頭に「四庫全書 雁門集及び瑟譜」としてカラーの書影を掲げるとともに、凡例ではこれを「内藤文庫善本の象徴」として載せたとしており、目録本文においてもこれを著録している。と

ころが同書後半に載せる「内藤文庫展観目録」にはなぜかこれを収載せず、したがって詳しい解説も見えない。そしてこれ以後、同文庫に四庫全書の原本が所蔵されていることはほとんど注意されてこなかったのである。

筆者はかつてそのことを遺憾に思い、「『統修四庫全書』と四庫関連叢書」という拙文の中でこれに触れたことがある。ただしその際は詳しく論じることができず、またその後新たに知られた資料もあるので、この度その文瀾閣四庫全書本について考察を加え、改めて注意を喚起したいと考えた次第である。またこの機会に、湖南と文瀾閣との関係、および文瀾閣四庫全書の鈔本などの諸事項、さらに同じく関西大学総合図書館の長澤文庫に蔵する文瀾閣四庫全書の原本一点についても考察を行なうこととする。

このほか、文瀾閣四庫全書に関し、その提要が金毓黻によって編集されたことについても述べておきたい。

一 内藤文庫の文淵閣四庫全書について

1 内藤文庫の文淵閣四庫全書

周知のように四庫全書は清の乾隆帝が当代屈指の学者を集集して編纂させたもので、乾隆四十六年（一七八一）に正本が完成した⁽²⁾。書式を半葉八行、行二十一字で統一し、各書の冒頭に当該書籍の解題すなわち「提要」を載せ、全体を経・史・子・集の伝統的な四部分類によって整理している。また経部は緑色、史部は紅色、子部は藍色、集は灰色の絹表紙を用い、装訂は包背装の形式をとった。七万九千余巻、約三万六千冊からなる空前の一大叢書がこうしてできあがったのである。

四庫全書編纂と同時に専用の書庫も建てられた。宮廷内の文淵閣には完成した正本を収蔵し、さらにこれを複写して作った副本を、奉天故宮（現在の瀋陽市）の文淵閣、北京円明園の文淵閣、熱河避暑山荘（現在の承德市）の文津閣にそれぞれ収めた。以上がいわゆる「内廷四閣」であるが、一般人の閲覧に供するために、さらに揚州大觀堂に文匯閣、鎮江金山寺に文宗閣、杭州聖因寺に文瀾閣を建てて各一部を蔵した。これが「江浙三閣」で、結局のところ合計七部のテキストがつけられたことになる。このほか、宮廷の武英殿にも副本一部を蔵したらしく、それを含めれば合計八部ということになる。出版はされず、すべて繕写された鈔本であった。

しかしその後、咸豊十年（一八六〇）のアロー戦争や咸豊三年（一八五三）以降の太平天国の乱などにより多くが失われ、ほぼ完全な形で残っているのは現在、台湾の故宮博物院に移管されている文淵閣本と北京の中国国家図書館に蔵する文津閣本である。また奉天の文淵閣本は一部を亡失したあと、文淵閣本による補鈔によってもとの姿をほぼ恢復し（後述）、文瀾閣本はこれまた相当部分を散佚したが、のちに他書により補鈔されて旧観に復したという。

さて、いま内藤文庫に蔵する四庫全書は、もともと奉天の文淵閣に収蔵されていたもので、次の三点がそうである。まず書誌事項を記しておく。

『瑟譜』六巻 元熊朋来撰 二冊

（請求番号 CI21*3*2201-1~2）

『韶舞九成楽補』一巻 元余載撰 一冊

（請求番号 CI21*3*2200）

『雁門集』四巻 元薩都拉撰 三冊

（請求番号 CI21*3*2202-1~3）

これらはいずれも大きさと三十一・七×二十・二センチ、匡郭二一・七×十四・四センチ、装訂は包背装。罫紙は朱糸欄で四周双辺。半葉八行、行二十一字。毎冊本文巻首に「文淵閣寶」の朱

文大方印、每冊末尾に「乾隆御覽之寶」の朱文方印の鈴印がある（図1～6参照）。

また、表紙は『瑟譜』と『韶舞九成楽補』が緑色の絹を、『雁門集』が灰色の絹を用いている。これは前二者が経部、後者が集部に属するからで、四庫全書の装訂そのものであることはいうまでもない。

このほか、各書の巻首副葉裏には詳校官や覆核官の名を記した黄色の小附箋が貼付されている。次のとおりである（図7参照）。

『瑟譜』…詳校官 臣 関槐

覆核官 臣 陸錫熊

『韶舞九成楽補』…詳校官 臣 関槐

覆核官 臣 陸錫熊

『雁門集』…詳校官 臣 翁方綱

覆核官 臣 陸錫熊

ここに見える陸錫熊、翁方綱および関槐はいずれも四庫館臣で、乾隆期を代表する学者として知られる人々である。この小附箋は、現在広く通行している文淵閣本四庫全書の影印本（台湾商務印書館および上海古籍出版社出版、また四庫全書珍本）ではモノクロで印字されているため黄色の附箋の形は見る事ができず、貴重なものといえる。

このうち『瑟譜』は元・熊朋来撰で、二十五弦の瑟おんじよによる音楽演奏につき古義をふまえつつ論述したもの、『韶舞九成楽補』は元・余載撰で、伝統舞楽について整理したものである。また『雁門集』は元・薩都拉の文集で、薩都拉は字は天錫、号は直齋。ムスリム家庭の出身のいわゆる色目人だが、詩人・画家・書家としてすぐれた作品を残した人物である。

さて、これらが文淵閣四庫全書の原本であることは以上の書誌的特色から知られるのであるが、それを裏づけるのが、文淵閣四庫全書から失われた書物のリストに上記の三点が載っていることである。次にそのことについて考察してみよう。

2 内藤湖南と文淵閣

奉天に置かれていた文淵閣四庫全書は清朝が滅んで中華民国になると、政治的混乱に伴って幾多の変遷をたどる。そして東北地方の権益を担っていた満鉄ついで満洲国の管理下に置かれることになるのだが、その経緯については、満洲国の康徳五年（一九三八）に刊行された『文淵閣四庫全書要略及索引』（国立奉天図書館）の「附録二 文淵閣四庫全書運復記」に説明がある。

それによれば、民国三年（一九一四）、文淵閣四庫全書は袁世凱の要請によって北京に運ばれる。しかしその後、管理が行き届かないまま放置されていたらしく、民国十四年（一九二五）、張学良、楊宇霆ら東北軍閥の支援によって故宮保和殿からものと奉天

文溯閣に戻されることになった。

ところが、その後の調査により、この移動の間に合計七十二巻が失われたことがわかった。次の書物群がそうである。

- 『礼書綱目』十巻
- 『春秋列国世紀編』一巻
- 『春秋集伝詳説』八巻
- 『繙訳五経四書』七巻
- 『瑟譜』六巻
- 『韶舞九成楽補』一巻（以上、経部）
- 『欽定勝朝殉節諸臣録』十二巻
- 『欽定盛京通志』四巻
- 『諡法』四巻（以上、史部）
- 『証治準繩』一巻
- 『高齋漫録』一巻（以上、子部）
- 『鯨背集』一巻
- 『西河集』九巻
- 『御製詩集』二巻
- 『玉瀾集』一巻
- 『雁門集』四巻（以上、集部）

ここには他ならぬ『瑟譜』『韶舞九成楽補』『雁門集』の三点が

はつきりと記されている。すでに明らかのように、これらが現在、内藤文庫に架蔵されているのである。

では、これらはどのようにして湖南の所蔵に帰したのであろうか。次に湖南と文溯閣の關係を見てみよう。

そもそも湖南は明治四十五年（一九二二）の三月から五月にかけて奉天に出張している。そしてこの時、富岡謙蔵、羽田亨らの協力を得て『滿文老檔』『五体清文鑑』を写真撮影するとともに、『礼部志稿』など文溯閣四庫全書の珍本を借出して鈔写している。⁽³⁾

この時に鈔写した書物は、日記等によれば六十八冊にのぼっており、それは次章に触れるとおりであるが、当時文溯閣の管理はしつかりしていたようで、湖南は「文溯閣の管理人は主任一人、兼任二三人のみにして、能く自在に書籍の出納を處辨せり」と報告している。⁽⁴⁾

この湖南の文溯閣調査は、前述した民国三年（一九一四）、袁世凱の要請による北京移管に先立つ時期であり、文溯閣四庫全書の一部が失われたとされる以前のことである。これに当時の文溯閣の管理状況を考えあわせれば、この調査時に湖南が『瑟譜』以下三書を入手した可能性は低いといえよう。もし入手していたのなら、湖南のことであるから日記等にそれと記したのであろう。

そうであれば、湖南文庫の文溯閣本三点は湖南の奉天訪問より後、一九一四年から一九二五年における文溯閣本移動の間に外部に流失したものであって、その後、何らかのルートを経て湖南の

所蔵に帰したものとと思われる。これは、あとに見る日本所蔵の他の四庫全書の例から見て、おそらく書肆による将来品であったかと考えられる。

なお、文溯閣から失われた合計七十二巻に関していえば、奉天ではその後、一九二六年夏から一年かけて、北京の故宮に蔵される文淵閣本によって補鈔作業を進め、全体が再び揃うことになった。そのことは前述した「文溯閣四庫全書運復記」によってわかるのであって、そこには、

迺以十五年夏 仿文淵閣例 請於故宮博物院 依文淵閣本
備二十人補鈔 以董衆譚峻董其事 盛夏揮汗 浹背霑衣 嚴
冬洩寒 炬火無溫 龜手瑟縮 而伏案校錄 未嘗稍輟 僅七
十二卷 越一載而始成⁵⁾

と、当時の苦心のさまが伝えられている。また当時、満鉄の奉天図書館司書としてその作業にかかわった植野武雄も「民国三年袁世凱帝政時代に北京に移り、更に民国十四年奉天に帰ってきましたことや、移転、変乱のために七十二巻を失ひましたことや文淵閣本により補写した事など」云々としてそのことを回顧している。⁶⁾これ以後、文溯閣四庫全書は一九三二年の満洲事変による戦乱をくぐり抜けて満鉄・奉天図書館の衛藤利夫や植野の尽力によって保全され、それは衛藤や植野らの誇りとすることころであった。

ついでに言えば、現在、文溯閣四庫全書は蘭州の甘肅省図書館に所蔵されている。一九六六年、ソ連との戦争勃発を恐れて瀋陽から移管されたものであって、いま目睹するを得ないのを遺憾とするが、二〇〇五年には所蔵庫として新たな文溯閣が建てられ、そこに往時のまま保管されているという。⁷⁾

二 内藤文庫の文溯閣四庫全書鈔本について

1 文溯閣調査時の鈔写

さて、湖南と文溯閣の関係でもう一つ興味深いのは、湖南が文溯閣四庫全書の書物を鈔写させていることである（図8および9参照）。

すなわち、明治四十五年（一九一二）に奉天を訪れた湖南は、同年の四月下旬から翌五月中旬にかけて、現地で写字生を十名ほど雇って文溯閣から『礼部志稿』等の書物を借出し、写させている。湖南自身が述べるところによれば、それは次のようであった。

此写した中で礼部志稿といふのはどういふものかと云ふと、即位の礼や、皇室の礼や、或は官吏登用試験、即ち科擧の事やいろ／＼ある、其中の主客司と云ふのには外国に關係した先例と云ふやうなものがある、之には星槎勝覽、西洋朝貢典録などにも載つて居らぬものまでも載つて居る明代の写本であるが、四庫の中に入つたから版本は一もない、では四庫

の本で写すより仕方がないからやつた。其他二三の本を写したが、一ヶ月ばかりの間に本の数が百六七十巻冊数にして六十八冊ばかりを写した。⁸⁾

このように湖南は、刊本のない、ただ四庫全書にのみ収められた『礼部志稿』などの貴重書を鈔写させて持ち帰ったのである。興味深いことに、この時に鈔写された『礼部志稿』の一部は現在、これまた内藤文庫に蔵されている(図10および11参照)。

『礼部志稿』六冊 明 俞汝楫編(請求番号 L21*4*22-1~6)

巻一~十一、巻十四~十五、巻九十九~一百

二十七・二×十九・六センチ、野なし

紙縫りで上下二カ所を綴じる(いわゆる大和綴じ)

『礼部志稿』八冊 明 俞汝楫編(請求番号 L21*4*23-1~8)

巻三~八、巻三十五~四十、巻八十九~九十五

二十六・六×十六・六センチ、野なし

四つ目綴じ

両者はいずれも巻頭に「欽定四庫全書」と題されているので四庫全書本の鈔写であることがわかる。また、筆跡が各冊ごとに違っているのは、複数の写字生に分担して筆写させたことによるであろう。大きさや装訂が前者と後者で互いに異なること、また巻

三~八が重複しているのも、ばらばらに分担筆写させたことに起因するものと思われる。

これに関連して、内藤文庫にはさらに『礼部志稿假目録』なる文献が蔵されている(図12参照)。

『礼部志稿假目録』七冊(請求番号 L21*4*24-1~7)

十八・七×十一センチ

これは「京都帝國大學文科大學」の朱罫紙を用いたペン書きの目録で、最初の巻一から最後の巻百に至るまで、目次のすべてが網羅されている。また、巻六以降には「一オ」「二ウ」といったように葉数の表・裏を記しているが、これは上記の『礼部志稿』鈔本のそれにびったり一致しており、同書の目次であることを示している。しかも末尾に「大正元年十二月九日写了」と明記されていることが注意される。

このことからわかるのは、明治四十五年(一九一二)に奉天から『礼部志稿』の写しを持ち帰った湖南が帰国後すぐ、そのすべてにわたって詳細な目次を作らせたということである。ここにいふ大正元年は明治四十五年と同年であって、その七月三十日から大正に改元されたことはいうまでもない。¹²⁾ このことはまた、湖南が中国の儀礼制度史に強い関心を持っていたことをよく物語るものでもある。湖南のいうように『礼部志稿』は刊本がなく、四庫

全書本のみが伝わるだけで、湖南は儀礼史研究の上で重要文献である本書を必要としていたのであろう。

なお、湖南は『礼部志稿』以外にも「二三の本を写した」といつているが、それが何なのかは未詳である。『礼部志稿』は全百巻であるが、湖南は「百六七十巻」を写したといっているから、これ以外に六、七十巻があったはずである。筆者は当初、あとに述べる『中原音韻』と『鯨背吟集』がそれにあたるのではないかと考えていたが、関連資料によると、これらは一九二二年の鈔写ではなく、もっと後の鈔写らしい。

2 その後の文溯閣四庫全書鈔写

さて、内藤文庫には、『礼部志稿』以外にも文溯閣四庫全書本を写した鈔本が少なくとも二点蔵されている。次がそうである（図13および14参照）。

『中原音韻』二巻 元 周徳清撰 二冊

（請求番号 I21*3*2199-1~2）

三十一・八×二十センチ、匡郭二十一・四×十四・三センチ

装訂は包背装、表紙の絹はこげ茶色。罫紙は朱糸欄で四周双辺。半葉八行、行二十一字。夾板ではさむ。ただし紐は

なし

『鯨背吟集』一卷 元 朱晞顔撰 一冊

（請求番号 I21*3*1654）

三十一・八×二十センチ、匡郭二十一・四×十四・三センチ

装訂は包背装、表紙の絹は紺色。罫紙は朱糸欄で四周双辺。

半葉八行、行二十一字

この両者は共通点が多い。本の大きさ、匡郭のサイズ、罫紙の形式などすべて同じである。いずれも包背装であること、冒頭に「欽定四庫全書」と記されることなども共通している。

ただし、違う点もあるのであって、表紙の絹面の色が前者はこげ茶色、後者は紺色であること、また筆跡が互いに違うこと、夾板が一方にはあるが一方にはないとった点も注意される。

いずれにしても、これらが文溯閣四庫全書を鈔写したものであることは明らかであって、まず『中原音韻』についていえば、每冊本文巻首に「文溯閣寶」の朱文大方印、上冊末尾に「乾隆御覽之寶」の朱文方印の鈴印がある。ただ、これが四庫全書の原本でないことは、上述した文溯閣四庫全書の亡失リストに本書が載せられていないことから察知せられるが、ほかに表紙の色が違うこと（同書は集部に属するから灰色でなくてはならないが、こげ茶色である）、巻首副葉裏に詳校官や覆核官の名を記した黄色の小附箋がないことからそう判断される。したがって「文溯閣寶」と「乾隆御覽之寶」の印章は、もとの印章に忠実に模刻されたものということになる。

一方、『鯨背吟集』の方は「文溯閣寶」と「乾隆御覽之寶」の鈴印がなく、詳校官たちの黄色の小附箋もないので、一見して原本ではなく写しであるとわかる。

この『鯨背吟集』に関して興味深いのは、書物とは別に三葉の朱糸欄紙が附されていることで、その第一葉は巻首を鈔写するとともに「文溯閣寶」の鈴印を手書きで写しとっている(図15参照)。第二葉は、末葉を鈔写するとともに「乾隆御覽之寶」の鈴印を、これまた手書きで写している。さらに第三葉はもともと巻首副葉裏にあるべきはずの総校官、校対官らの名前を書き写している。つまりこの本は、もとの文溯閣本をなるべく忠実に写し取ろうとしたものなわけである。

このように、内藤文庫の『中原音韻』と『鯨背吟集』は文溯閣本を鈔写したテキストであるが、このうち『鯨背吟集』の鈔写についてはより詳細な経緯がわかるので次に説明しておきたい。

『鯨背吟集』には鈴鹿三七の湖南宛手紙が附されており、そこにこのようにある(図16参照¹³⁾)。

拝啓仕候

陳ば写し物出

来二付御届け

申上候

原本ハ昨日東

京和田氏へ発

送致し置候

頓首

九月七日

鈴鹿三七

拝

内藤先生

侍史

小生一同参館可致候

処昨今多忙その内

拝趨可致候

手紙の差出人の鈴鹿三七は京都の卜部神道家の神官で、これによると「写し物出来二付」とあるように、鈴鹿三七が鈔写させたものであること、そして「原本ハ昨日東京和田氏へ發送致し置候」というように、原本が「東京和田氏」の所蔵であったことがわかる。

この「東京和田氏」とは、和田維四郎つみなしろうのことである。なぜそれがわかるかというと、和田の蔵書「雲村文庫」に文溯閣四庫全書の『鯨背吟集』原本が蔵されていたからである。いま和田の『雲村文庫目録』乙第二輯・甲追補(一九二六年)を見ると、旧鈔本

として「欽定四庫全書」を著録している中に「鯨背吟集」があり、そこに「文溯閣寶 乾隆御覽之寶ノ印アリ」と明記されているのである(図17参照)。

和田維四郎(一八五六―一九二〇)は、日本近代鉱物理学の創始者として知られ、初代地質調査所所長、東大教授、八幡製鉄所長官を歴任するとともに、雲村と号して古書を収集、研究し、貴重書閲覧の記録『訪書余録』を著わすなど書誌学者としても活躍した人物である¹⁵⁾。

以上からわかるように、内藤文庫所蔵の文溯閣四庫全書『鯨背吟集』の鈔本は和田維四郎の雲村文庫本を写したものであった。いま、前にも言及した「文溯閣四庫全書運復記」を見ると、文溯閣から失われた七十二巻のうちの一つとして『鯨背集』一卷が載っていることがわかる。これがいま問題にしている『鯨背吟集』であることは明らかであって、おそらく文溯閣『鯨背吟集』は『瑟譜』『韶舞九成楽補』『雁門集』と同様に一九一四年から一九二五年の間に外部に流出して日本へと将来され、そして和田の得るところとなったのであろう。

3 東洋文庫および杏雨書屋所蔵の関連四庫全書

ところで、この文溯閣本『鯨背吟集』の原本は現在、東京の東洋文庫の所蔵となっている。すなわち、

〔東洋文庫蔵〕

『鯨背吟集』一卷(貴重書 XI-9-B-20-0 文溯閣本)

がそれである。これは和田が、岩崎久弥によって創設された東洋文庫の古籍収集責任者だったことにより、和田の雲村文庫の多くが東洋文庫の所蔵となったためである。

このほか、『雲村文庫目録』乙第二輯・甲追補にはもう一つの四庫全書が著録されているのでついでに触れておきたい。清・高晋等奉勅撰『南巡盛典』零本一冊(巻二十至二十二)がそれで、同目録に鈐印「文源閣寶」「圓明園寶」が記されるように、もともと円明園の文源閣本四庫全書であった(図17参照)。先にも触れたように、文源閣本は咸豊十年(一八六〇)のアロー戦争の際、英仏聯合軍が円明園を焼き払ったことで灰燼に帰したのであったが、まったく消失し去ったわけではなく、そのうちの零本が日本に伝わり、和田の所蔵となっていたのである。同本は現在、前述の文溯閣本『鯨背吟集』と同じく、東洋文庫に所蔵されている。次がそうである。

〔東洋文庫蔵〕

『南巡盛典』零本 存巻第二十至第二十一 一冊

(貴重書 XI-9-B-22-0 文源閣本)

なお、このほか、大阪の杏雨書屋の「恭仁山莊善本」に『南巡盛典』零本一冊（巻二十八至二十九）が伝わっていることも、はなはだ興味深い。この文源閣本『南巡盛典』は「雲邨文庫」の鈴印をもっているから、もともと和田維四郎の所有するものであつて、のちに湖南の所蔵に帰したのである。¹⁶ すなわち、

〔杏雨書屋蔵 恭仁山莊善本〕

『南巡盛典』零本 存巻第二十八至第二十九 一冊（文源閣本）

がそうである（図18参照）。恭仁山莊善本が湖南の旧蔵書であることはいうまでもない。これは上に述べた東洋文庫本『南巡盛典』と巻数が違うことから、結局、和田は同書の零本を少なくとも二冊持つていて、そのうちの一冊が東洋文庫に帰し、一冊が湖南の蔵するところとなったことになる。

ちなみに『南巡盛典』をめぐるもう一つエピソードを紹介すれば、日本には、文津閣四庫全書本の『南巡盛典』ももたらされていた。東京の大倉文化財団・大倉集古館旧蔵で、全百二十巻、四十二冊、每冊本文巻首に「文津閣寶」の朱文大方印、每冊末尾に「避暑山莊」の朱文大方印が押されている。これは和田の所蔵していた文源閣本とは違う文津閣本であり、全書が揃っているところが貴重である（図19参照）。ただし近年、二〇一三年に至つて、大倉集古館の数多くの貴重漢籍類は北京大学の購入するところ

となり、同大学図書館に「大倉文庫」として所蔵されることになった。文津閣本『南巡盛典』はこうして「里帰り」したわけだ。日中間における近年の書籍交流史の一コマとして記憶にとどめておいてよいであろう。¹⁷ かつては日本側が中国の書籍を買ったが、今は中国側が日本所蔵の書籍を買い戻しているという、一種の逆転現象がここには見られるのである。

三 長澤文庫蔵の文瀾閣四庫全書

さて、関西大学総合図書館にはもう一つ、長澤文庫に文瀾閣四庫全書の原本一点が蔵されているので報告しておきたい。同文庫は日本を代表する書誌学者、長澤規矩也（一九〇二—一九八〇）の旧蔵書であり、次が架蔵されている。

『嘉禾百詠』一卷 宋張堯同撰 一冊

（請求番号 C123*B24）

二十七・六×十七・三センチ、匡郭二十×十二・九センチ

線装、四つ目綴じ、黒灰色の絹表紙

罫紙は朱糸欄で四周双辺。半葉八行、行二十一字

これは本文巻首に「古稀天子之寶」の白文大方印、末尾に「乾隆御覽之寶」の朱文方印の鈴印があり、巻首の鈴印が文瀾閣本とは違っている。本の大きさと匡郭も上述した文瀾閣本より小ぶりだ

ある。包背装ではなく線装であることも文瀾閣本とは違っている（図20および21参照）。

このほか、巻末副葉に総校官と校対の名を記すとともに、さらに詳校官の名を記した黄色の小附箋が貼付されているのも文瀾閣本とは異なるのであつて、文瀾閣本の場合、巻末ではなく巻頭の副葉にこれらが記され、また添付されていることは上述したとおりである（図22参照）。

総校官 編修 臣 吳裕徳

編修 臣 胡 栄

校 対 監 生 臣 蔣光弼

詳校官左都御史 臣 李 綬

詳校官内閣中書 臣 繆炳泰

長澤自身の回想によれば、昭和二年（一九二七）、「北平の本屋から小型の四庫全書本の嘉禾百詠が送られてきた」といい、それを「金二十五元」を送金して購入したという。¹⁸ またこの本について長澤は、

首に「古稀天子之宝」の白文方印、尾に「乾隆御覽之宝」朱文方印があるだけで、閣の印はないので、北支の学者中には文瀾閣本であることを知らぬ人が多いのも面白い。体裁は小

さいだけの差で（例えば予の蔵本は匡郭内縦六寸七分横四寸二分半）、字詰等は同じである。……初は文瀾閣本ではあるまいと考え、殊に二三の老先輩に尋ねたが文瀾閣本とは認めてくれぬので、文瀾閣本とは知らずに買ひ込んだのである。併し、文瀾閣本を再見して同種なのを知り、且既見の各書が何れも現在鈔配されてゐるのを見れば、底本、副本、摹本などといふ臆説は固より、他の二閣——江浙三閣のうちの文匯閣と文宗閣（引用者注）——の残本と考へる必要もあるまい。¹⁹

ともいつているが、これは昭和五年（一九三〇）、杭州を訪問した長澤が当地の文瀾閣本を実見して確認した時の話であつてたいへん興味深い。

中国北京の学者たちは同書に「文瀾閣」の鈴印がないことなどからこれを文瀾閣本とは認めなかつたというが、いま光緒二十四年（一八九八）に文瀾閣について記した孫樹礼『文瀾閣志』を調べてみると、文瀾閣本の款式について次のようにある。

經部葵緑絹面、史部紅絹面、子部月白絹面、集部黒灰絹面。
……每部首列提要一編、附総纂官・総校官臣姓名、末綴騰録生・校対生臣姓名、另黏黃簽詳校官臣姓名、每冊首頁印鈴古稀天子之宝白文、後頁印鈴乾隆御覽之宝朱文印。（卷上）²⁰

ここにいう各書冒頭に提要一篇を載せること、それに総纂官・総校官臣の姓名を附すことはもちろん、巻末に謄録生・校対生の名を掲げるとともに黄簽（黄色の小附箋）に詳校官の名を書いて貼りつけることなど、すべて長澤文庫本と一致している。そればかりか、巻首に「古稀天子之寶」の白文印を、末尾に「乾隆御覽之寶」の朱文印を押す点についても同じで、そもそも文瀾閣本には「文瀾閣寶」の鈐印がなかったことはこれでわかる。

念のため、文瀾閣の書目も見てみよう。民国十二年（一九二三）の錢恂編『壬子文瀾閣所存書目』によると、その集部の「嘉禾百詠一卷」の下に「一冊 補鈔」と記されている。⁽²¹⁾ また民国十八年（一九一九）の序をもつ楊立誠編『文瀾閣目書目』にも「嘉禾百詠」一卷が載っているが、備考欄に「丁氏補抄」と記されている。⁽²²⁾

ここに「丁氏」というのは杭州の丁申、丁丙兄弟のことで、彼らは光緒八年（一八八二）以降、太平天国軍によって亡佚した文瀾閣四庫全書を他書によって補鈔する作業にとりこんでいた。つまり、これらの記事によって文瀾閣から『嘉禾百詠』一卷が失われていたため、丁子兄弟によって壬子年、すなわち民国元年（一九一三）には補鈔されていたことがわかるのである。長澤が同書入手したのは昭和二年（一九二七）のことであるから、流失後かなり経って市場に出たということになる。なお、装订が包背装ではなく線装であることが気にはなるが、のちにそのように仕立て直されたと考えれば済む話である。

こうしてみる、長澤文庫の『嘉禾百詠』が文瀾閣四庫全書本であることは間違いなく、長澤氏の判断は正しかったことになろう。本書は本学図書館に蔵する四庫全書のもう一つの原本としてはなほだ貴重なものである。⁽²³⁾

なお、このほか日本には四庫全書の残本が他にも少なからず伝わっている。そのことは本稿の範囲を越えるので割愛するが、長澤規矩也および劉玉才の論文に触れられているので参照されたい。⁽²⁴⁾

小 結——また『文瀾閣四庫全書提要』について

以上、考証がいくらか煩瑣になったが、本稿における考察はおおむね次のようにまとめることができる。

- 一、本学内藤文庫には文瀾閣四庫全書の原本として『瑟譜』、『韶舞九成楽補』、『雁門集』の三点を蔵する。
- 二、これらは一九一四年から一九二五年にかけて、文瀾閣四庫全書が奉天と北京を移動する間に外部に流出し、何らかのルートを経て湖南の所蔵に帰したものである。
- 三、湖南と文瀾閣の関係ついていえば、湖南は一九一二年三月から五月にかけて奉天に出張し、その間『礼部志稿』など文瀾閣四庫全書の珍本を鈔写させている。
- 四、この文瀾閣四庫全書本『礼部志稿』の鈔本の一部は内藤文庫に蔵されている。同書の詳細な内容目録『礼部志稿仮目録』

も内藤文庫にある。

五、ほかに内藤文庫には文溯閣四庫全書本『中原音韻』と『鯨背吟集』を写した鈔本も蔵されている。

六、このうち『鯨背吟集』鈔本は東京の蔵書家、和田維四郎の所蔵本を借りて写したもので、その原本は現在は東洋文庫の所蔵となっている。

七、和田維四郎はほかに、北京円明園にあった文源閣本の『南巡盛典』零本を二冊所有しており、現在、そのうちの一冊は東洋文庫に蔵され、一冊は湖南の架蔵を経て杏雨書屋に恭仁山莊善本として蔵されている。

八、さらに、本学長澤文庫には文瀾閣四庫全書の原本として『嘉禾百詠』一点を蔵する。同書は『文瀾閣志』にいう款式や書目からしても文瀾閣本であることが改めて確認されたといえる。

本稿を締めくくるにあたって、今回とりあげた文溯閣四庫全書に関し、その提要が編纂されたことに関してつけ加えておきたい。はじめに述べたように、四庫全書の各書には、冒頭にみなその書の提要がついている。この提要はきわめて有用なものであるところから、四庫全書が成ったのと同年の乾隆四十六年（二七八一）に全体が抜き出され、補訂を経て乾隆六十年（一七九五）に武英殿から単行本『四庫全書総目』として出版された。²⁶⁾その後、この

書は木版本や石印本により何度か版を重ね、一九三一年に至って上海・商務印書館から万有文庫の「国学基本叢書」として活字本が出され、書名も『四庫全書総目提要』と、「提要」の二字がつけ加えられた。そしてこの活字本は戦後、台湾・商務印書館から影印本が索引つきで出版される。現在、最も通行しているのはおそらくこの台湾版で、筆者もこれを用いている。

ところが、この『四庫全書総目』の内容は各書に附されていたもとの提要とは必ずしも同じではなく、異なる記述も多い。そのため、中国の学者金毓黻（一八八七—一九六二）は文溯閣四庫全書から提要部分を取り出し、康德二年（一九三五）『文溯閣四庫全書提要』として刊行した。当時金毓黻は満洲国の国立奉天図書館副館長であり、いわば満洲国の力を借りてもう一つの活字本四庫提要が上海・商務印書館本に継いで世に出たわけである。

この『文溯閣四庫全書提要』は四庫全書から提要を直接抜き出したものであるため四庫提要のもとの形を忠実に伝えるといえるが、満洲国における出版であることなどから従来ほとんど注意されてこなかった。ただ、近年になって金毓黻の着実な仕事ぶりや四庫全書そのものに注目が集まるようになり、影印版が二度刊行されている。

『文溯閣四庫全書提要』の出版に関する経緯は次のとおりである。

- 一、一九三五年（康德二年）、『文溯閣四庫全書提要』線装三十二冊が奉天・遼海書社より刊行される。活字本。
- 二、一九三八年（康德五年）、『文溯閣四庫全書要略及索引』平装一冊が満州国・国立奉天図書館より刊行される。活字本。

三、一九九九年、『金毓黻手定文溯閣四庫全書提要』精装二冊が北京・中華全国図書館文献縮微復制中心より影印出版される。

四、二〇一四年、『文溯閣四庫全書提要』（金毓黻等編）精装六冊が北京・中華書局より影印出版される。書名索引の検字を附す。

このように『文溯閣四庫全書提要』は近年再評価され、いわばリバイバルしたことになる。²⁷⁾

ここでもう一つ注意しておきたいのは、金毓黻が編纂作業を進めつつあった一九三一年、上述のように、上海・商務印書館が活字本の『四庫全書総目提要』（万有文庫本）を刊行し、さらに一九三五年には文淵閣四庫全書の中の貴重書二百三十種を集めた「四庫全書珍本初集」を影印出版していることである。このことは当時、南（上海）と北（奉天）で四庫全書に関する作業が同時に、だが別々に進行していたことを示すものであって、たいへん興味深い。

もちろん、金毓黻は上海のこうした動きを知っていて、一九三五年の『文溯閣四庫全書提要』冒頭の解題では商務印書館の『四庫全書総目提要』に触れ、同書に「提要」の二字をつけ加えたのは、その方がわかりやすいとはいえ、原本の旧とは違うといって批判している。確かにそうで、商務印書館版は書名としては、本来の『四庫全書総目』を用いるべきであったかもしれない。

ところで、金毓黻の作業を支援した満鉄・奉天図書館司書の植野武雄は関西大学のルーツの一つ、泊園書院で石濱純太郎に学んだ人物であり、植野は戦後、関西大学非常勤講師となった。また石濱は他ならぬ湖南を師と仰いでいた。文溯閣四庫全書に関しては内藤湖南——石濱純太郎——植野武雄という、関西大学に関係する人々がかかわっていたわけで、そうした奇遇を感じながら本稿を執筆したことを最後に附言しておきたい。

注

- (1) 吾妻重二『続修四庫全書』と四庫関連叢書（関西大学図書館フォラム）第九号、二〇〇四年。いま吾妻『宋代思想の研究——儒教・道教・仏教をめぐる考察』（関西大学出版部、二〇〇九年）に収む。
- (2) 以下、四庫全書編纂の詳細については近藤春雄『四庫全書概説』（東亜研究会、一九三七年）、黄愛平『四庫全書纂修研究』（中国人民大学出版社、一九八九年）を参照。
- (3) 『内藤湖南全集』第十四卷（筑摩書房、一九七六年）「年譜」、六六五頁。また『文溯閣の四庫全書』（『内藤湖南全集』第十二卷、筑摩書房、一九七〇年）参照。この論文は一九二二年『大阪朝日新聞』原載。ま

た「奉天訪書日記」(『内藤湖南全集』第六卷、筑摩書房、一九七二年)も見られたい。

- (4) 前注所掲の内藤湖南「文瀾閣の四庫全書」による。
- (5) 『文瀾閣四庫全書要略及索引』(国立奉天図書館、一九三八年)「附録二 文瀾閣四庫全書連復記」、一八頁。また同書の「附録六 文瀾閣四庫全書抄補書名表」参照。
- (6) 植野武雄「文瀾閣四庫全書に就て」(『斯文』第一九編第七号、一九三七年)。満洲事変の際、消失の危機に瀕した文瀾閣四庫全書を救ったのも、満鉄・奉天図書館館長の衛藤利夫および同図書館司書の植野武雄であった。そのことについては、吾妻「植野武雄とその東洋学——附・著述目録」(『関西大学東西学術研究所紀要』第五一輯、二〇一八年)三〇—三二頁を参照されたい。
- (7) 『WGO: 百度百科』「文瀾閣(蘭州市蔵書楼)」(二〇一八年十二月十日)。
- (8) 内藤湖南「奉天訪書談」。『内藤湖南全集』巻十二卷(筑摩書房、一九七〇年)所収、三一—六頁。
- (9) なお、これらは初めに述べた『関西大学所蔵 内藤文庫漢籍古刊古鈔目録』(『関西大学図書館』一九八六年)九三頁にも著録されている。
- (10) 前注『関西大学所蔵 内藤文庫漢籍古刊古鈔目録』九三頁にも著録あり。
- (11) なお『四庫全書総目』は百十巻とする。四庫全書所収の同書は文瀾閣本、文瀾閣本とも百巻なので、これは四庫全書が成ったあと、百十巻本により『総目』の記述に訂正がほどこされたものと思われる。
- (12) 筆跡からしてこのペン書きの目録は湖南自筆ではなく、人に命じて作らせたものと見られる。
- (13) このうちいくつかの難字の翻刻については本学非常勤講師の吉川潤氏にご教示いただいた。
- (14) 内藤文庫には鈴鹿からの手紙が他に数通蔵されおり、交遊があったことがわかる。関西大学学術リポジトリ「関西大学所蔵内藤文庫17…湖南宛書」(二〇一三年、<http://hdl.handle.net/10112/10443>)参照。な

お、鈴鹿三七は蔵書家でもあり、現在その蔵書が愛媛大学附属図書館に「鈴鹿文庫」として収められている。

- (15) 『国史大辞典』第十四卷(吉川弘文館、一九九三年)「和田維四郎」参照。
- (16) 『恭仁山莊善本書影』(大阪府立図書館、一九三五年)の「九二 欽定四庫全書 史部 南巡盛典」、「新修恭仁山莊善本書影」(臨川書店、一九八五年)の図版一六三頁、解説九四頁。
- (17) 北京大学図書館編『北京大学図書館蔵・大倉文庫・書志』(全五冊、北京・中華書局、二〇一四年)第二冊四九〇頁、および北京大学図書館編『北京大学図書館蔵・大倉文庫・善本図録』(全二冊、北京・中華書局、二〇一四年)下冊五九八頁以下に文瀾閣本『南巡盛典』の解説と書影を載せる。
- (18) 長澤規矩也「書誌随想」(『長澤規矩也著作集』第六卷、汲古書院、一九八四年)二五九頁。もと『大安』第十二巻第二号、一九六六年)に掲載。また同文によれば、四庫全書について発表したことのある市村瓊次郎が、冒頭に文瀾閣の印がないため、せいぜい四庫本の底本だという結論を出したという。
- (19) 長澤規矩也「現存の四庫全書と複製の価値」(『長澤規矩也著作集』第一巻、汲古書院、一九八二年)三四八頁。もと『書物趣味』第一巻第一号(ブツクドム社、一九三二年)に掲載。
- (20) 『文瀾閣志』、『中国園林名勝志叢刊』三十七所収影印(廣陵書社、二〇〇六年)。
- (21) 錢恂編『壬子文瀾閣所存書目』(浙江公立図書館、一九三三年)。「明清以來公藏書目彙刊」(北京図書館出版社影印、二〇〇八年)第一冊所収。
- (22) 楊立誠編『文瀾閣目書目』(浙江省立図書館四庫目略發行處、一九二九年)。前注所掲『明清以來公藏書目彙刊』第二冊所収。
- (23) なお、補鈔により旧に復した文瀾閣四庫全書は現在、杭州市の浙江図書館の所蔵となっている。この文瀾閣四庫全書は二〇一五年五月、

精装一五五九冊という膨大な分量をもって杭州出版社からすべて影印出版された。

- (24) 前注所掲の長澤規矩也「現存の四庫全書と複製の価値」、および劉玉才「日藏《四庫全書》散本雑考」(『文献』季刊、二〇〇六年十月第四期)。ただし、本稿でとりあげている内藤文庫蔵の文淵閣本やその鈔本については触れられていない。なお、張子文「四庫縹緗万卷書…国家図書館蔵与《四庫全書》相關善本叙録」(台湾・国家図書館、二〇一二年)は、台北の国家図書館に蔵する四庫全書関連の善本につき書影と解説を載せており、そこには文淵閣本四庫全書の書物が多く含まれている。

- (25) 黄愛平『四庫全書纂修研究』(中国人民大学出版社、一九八九年)三〇七、三二〇頁。

- (26) たとえば次のとおりである。

- 一、浙江杭州本(木版本) 底本となったのは乾隆年間の武英殿版が底本で、その誤りを正して刊行。北京・中華書局『四庫全書総目』(一九六五年、一九八一年再版)として影印出版されている。
 - 二、同治七年(一八六八) 広東書局本(木版本) 原田種成編『訓点本四庫提要』(汲古書院、一九八一年、一九九四年)に影印するのがこの版である。
 - 三、一九二六年 上海・大東書局本(石印本) 「四庫未収書目提要」を付す。本書は哈仏燕京学社引得七『四庫全書総目及未収書目引得』の底本となった。
- (27) なお、近年の関連出版物として『文津閣四庫全書提要滙編』(北京・商務印書館、二〇〇六年)全五冊がある。これは文津閣四庫全書の各書の提要をそのまま抜き出して影印収載している。近年の中国における「四庫学」ブームを物語るものといえよう。

【付記】 本稿は、日本学術振興会科学研究費・基盤研究(B)(一般)「泊園書院を中心とする日本漢学の研究とアーカイブ構築」(研究代表者：吾妻重二

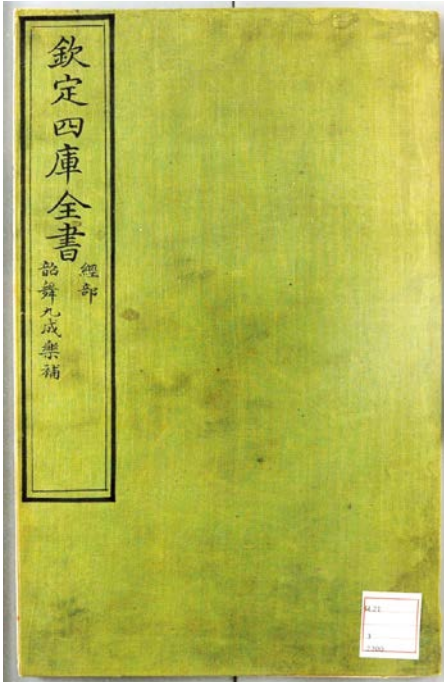


図2 文溯閣四庫全書本『韶舞九成樂補』
(内藤文庫蔵)

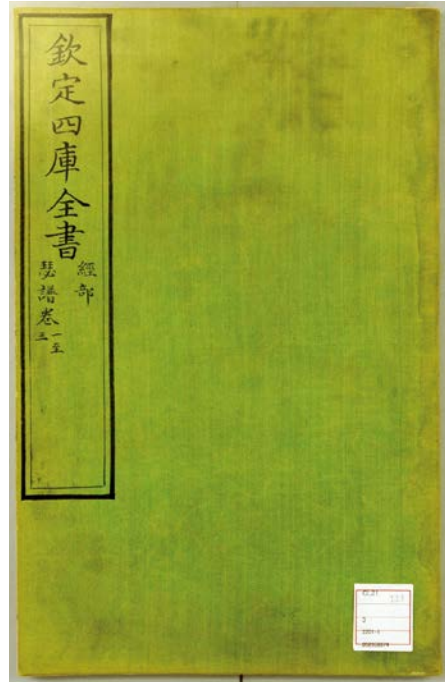


図1 文溯閣四庫全書本『瑟譜』(内藤文庫蔵)



図3 文溯閣四庫全書本『雁門集』(内藤文庫蔵)

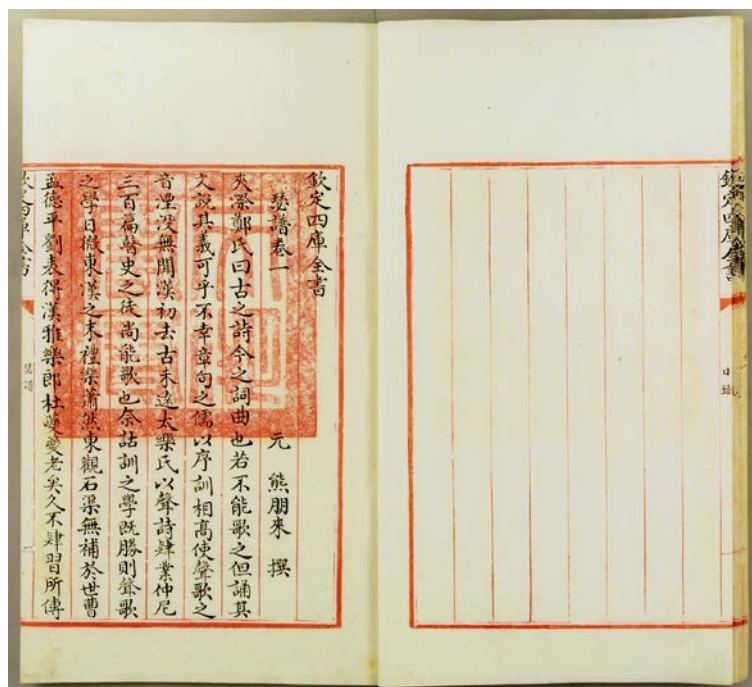


図4 同『瑟譜』巻首「文潮閣寶」の朱文大方印がある。



図5 同『韶舞九成樂補』末尾「乾隆御覽之寶」の朱文方印がある。

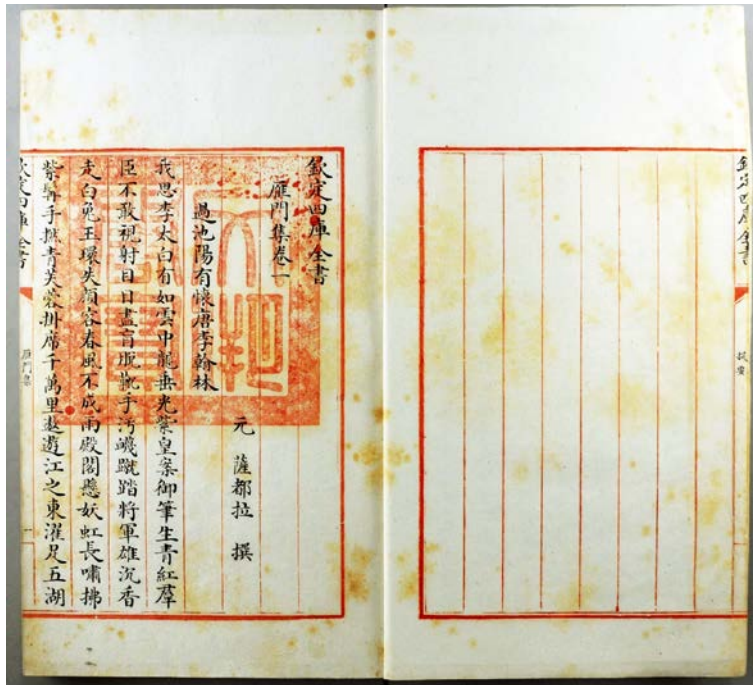


図6 同『雁門集』巻首 やはり「文潮閣寶」の朱文大方印がある。

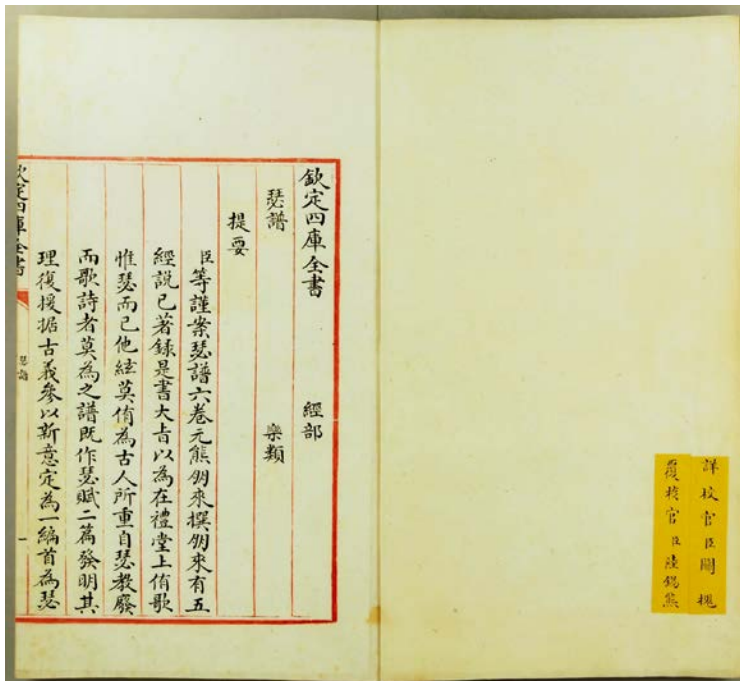


図7 詳校官と覆核官の名を記した黄色の小附箋（『琴譜』）



図9 文溯閣で調査を行う湖南
 (『内藤湖南全集』巻六 附録)

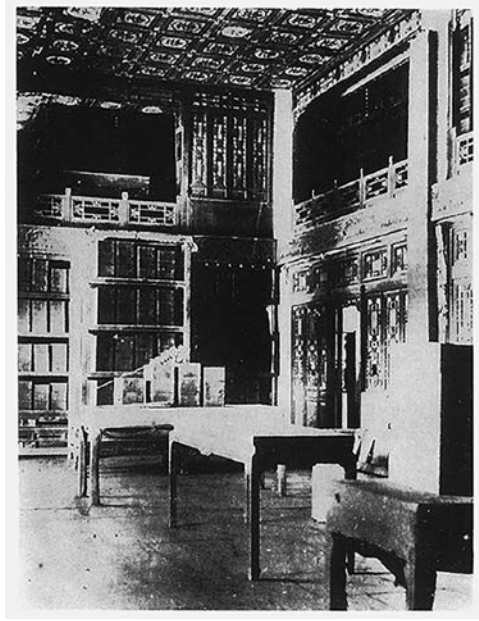


図8 文溯閣の内部 (『内藤湖南全集』巻六 附録)

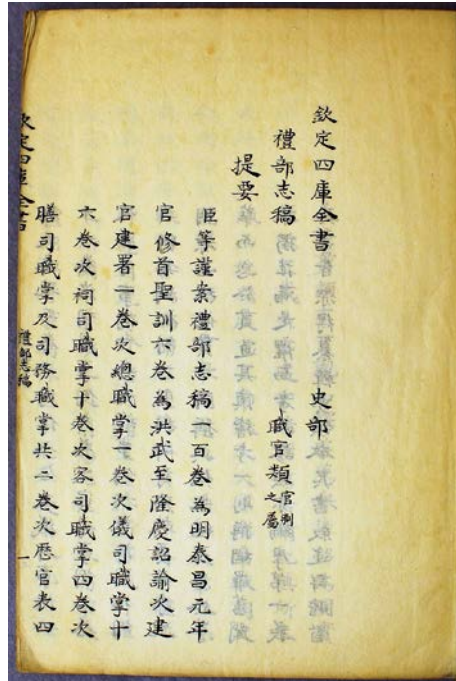


図10 文溯閣四庫全書本『礼部志稿』の鈔本
 (前者の提要部分、内藤文庫蔵)

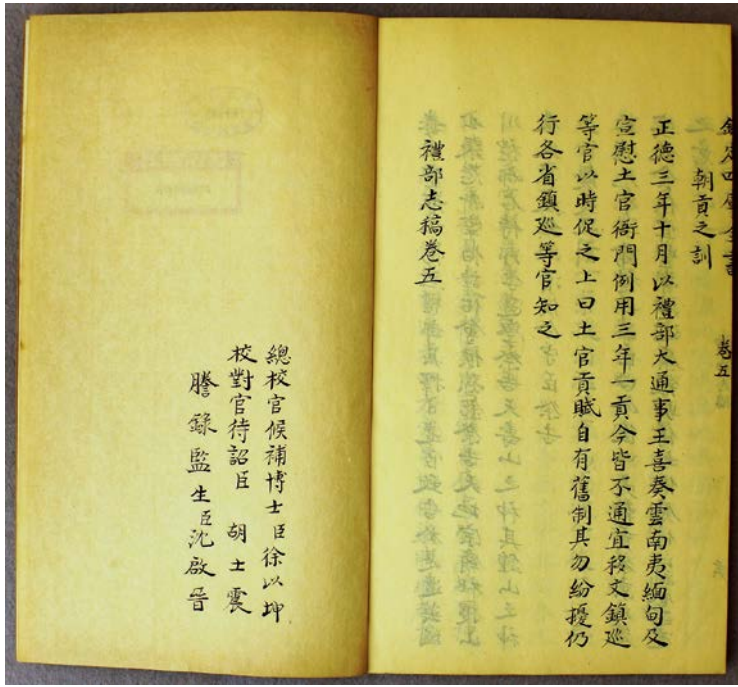


図11 同『礼部志稿』の鈔本（後者の巻五末、内藤文庫蔵）

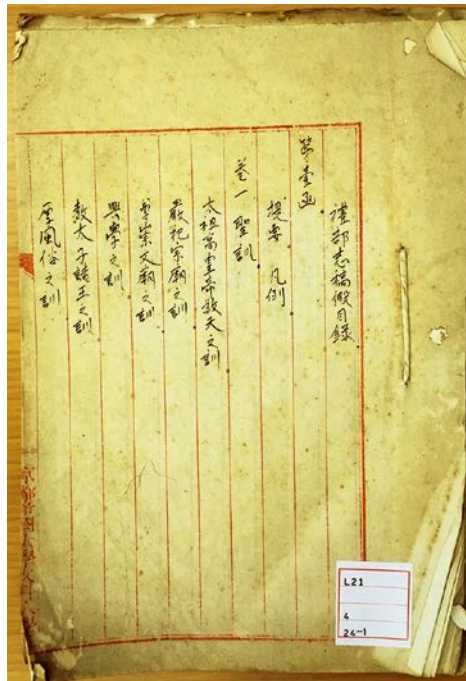


図12 『礼部志稿假目録』（内藤文庫蔵）



図14 文溯閣四庫全書本『鯨背吟集』の鈔本
(内藤文庫蔵)。「文溯閣寶」の朱文大方
印がない。



図13 文溯閣四庫全書本『中原音韻』の
鈔本 (内藤文庫蔵)



図15 同『鯨背吟集』附属の第一葉朱糸欄野紙

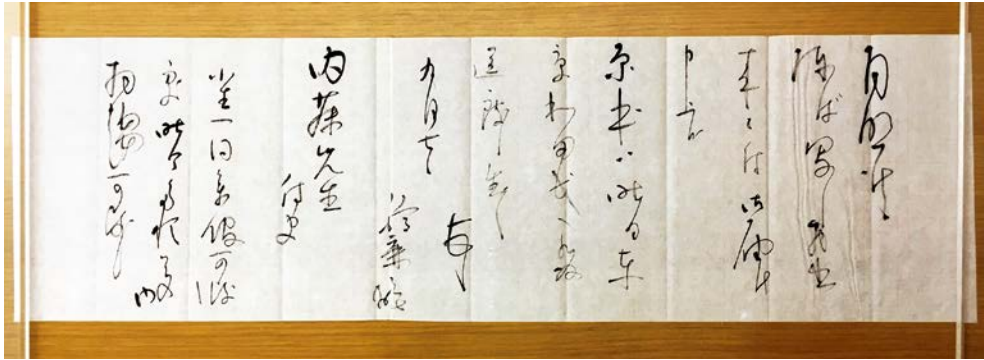


図16 鈴鹿三七の湖南宛手紙

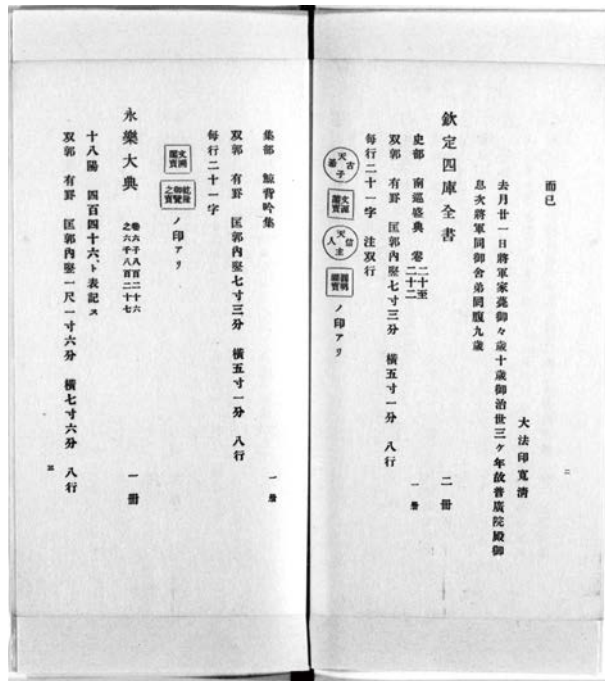


図17 『雲村文庫目録』乙第二輯・甲追補
 「欽定四庫全書」以下に「南巡盛典」（文源閣本）と「鯨背吟集」（文潮閣本）が著録される。



図19 文津閣四庫全書本『南巡盛典』
 (大倉集古館旧蔵、現在は北京大学図書館「大倉文庫」蔵)



図18 文源閣四庫全書本『南巡盛典』
 (杏雨書屋蔵 恭仁山莊善本)

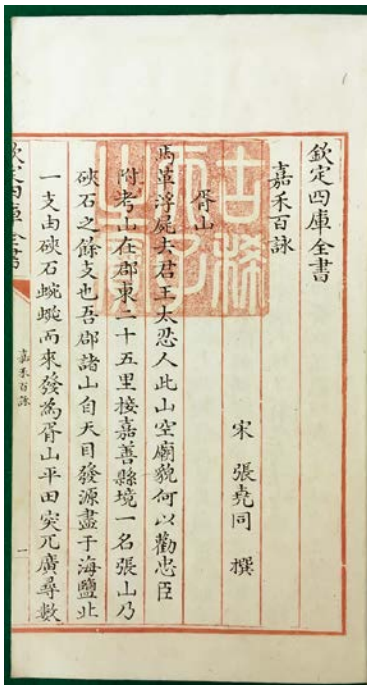


図21 同『嘉禾百詠』卷首
 「古稀天子之寶」の白文大方印がある。



図20 文淵閣四庫全書本『嘉禾百詠』
 (長澤文庫蔵) 表紙

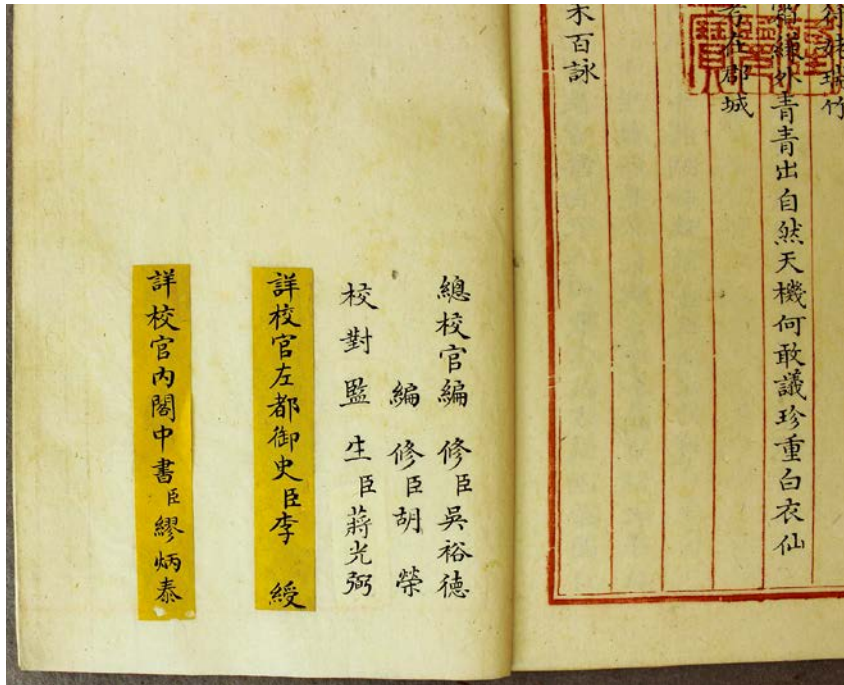


図22 同『嘉禾百詠』末尾
総校官と校対の名を記すとともに、詳校官の名を記した黄色の小附箋を貼付する。右上には「乾隆御覽之寶」の朱文方印がある。

On Wensuge Siku-quanshu Books in the Naito Bunko Collection, Kansai University

AZUMA Juji

Naito Bunko, a collection of the work of historian Naito Konan in the Kansai University General Library, contains many rare books, but little is known thus far about the original work of Wensuge Siku-quanshu “文溯閣四庫全書.” This paper investigates and considers the books *Sepu* “瑟譜,” *Shaowu jiuchengyao bu* “韶舞九成樂補,” and *Yanmen ji* “雁門集,” in addition to the relationship between Konan and Wensuge and the written copy of Wensuge Siku-quanshu. I will also examine an original book of Wenlange Siku-quanshu held in the Nagasawa Bunko of the Kansai University General Library using new materials. Furthermore, I would like to mention about the annotated catalog of Wensuge Siku-quanshu “文溯閣四庫全書提要” compiled by Jin Yufu and its significance.

キーワード：関西大学総合図書館（the Kansai University General Library）、内藤湖南（NAITO Konan）、長澤規矩也（NAGASAWA Kikuya）、和田維四郎（WADA Tsunashirou）、金毓黻（JIN Yufu）